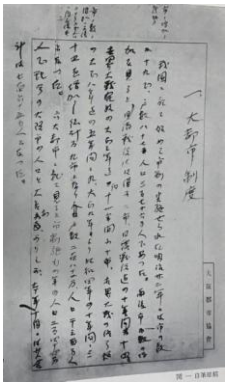
関一市長「最後の譫言」

自宅書棚に関博士論文集編集委員会編『都市政策の理論と実際』（復刊）、大阪都市協会、1968 年がある。大阪千日前の天地書房の印があり、1500 円と書かれている。大阪市立大の大学院時代に買ったもので、多くの箇所に赤や黒の線が引いてある。浪人時代を含め、道頓堀の古本屋めぐりが数少ない楽しみだった。久しぶりに再読しているが、関秀雄氏による『関一小伝』に、関市長最後のことが書かれている。写真下は本書掲載の関一自筆原稿。



26 日朝よりは精神朦朧に陥れるが、その間に発せる譫言（うわごと）は、多く市政問題・予算問題または貴族院出席等に関するものにして一家の私事に関するもの一もありざりき。主治医熊谷博士が大阪市教育会編『故関市長を偲ぶ』に寄せられたるものには次のごとき記述を見る。

『故市長様の譫語は 25 日の夕方頃より始まり、26 日は意識不明の間はほとんど譫言のみでありましたが、その譫言は全部役所関係・予算関係のことに限られていました。予算関係ことに風水害予算を内務省かあるいは大蔵省に行って次官局長にでも説明するかのごとく、きわめて懇切丁寧に、細き数字まで並べられ、たとえば「1150 万円であったか、1100 万円であったか、50 万円ぐらいはいずれにしてもこの予算は…云々」とか、「…以上御説明申し上げましたように、これらの事業の遂行には、先ほど申し上げました 3 千何百万円を要しまするので…」等と、市会で説明されるような句調で始終語り続けられたかと思うと、あるときには、金子書記の名を呼ばれ、「飛行機の用意はできているか」（議会出席のため急ぎ上京して国政に参加する心持ちなり）とか、「書類は全部揃うているか」とか、「宿の具合はよろしいか」とか、貴族院議員としての職責を果たさんがため、苦悩呻吟のうちにも、その真心を譫言にまで現わしておられました。ある時にはベルギー・オランダ・ドイツ・フランス等の法学者につき、一々その人の名を揚げ、人物の偉大なることや、業績の大なることや、または長所短所の批判までして、あたかも子弟に諄々として教育するがごとく、あるいは学生に講義するかのように、今さらながら学者市長としての面目躍如たるものあるを感じさせられました。御家族の方々としては心許なかったかも知れませんが、その譫言たるや、すべて公的のもので、家庭的のことは一言半句をも聞くことを得ませんでした。いかに真剣に全精力を公的方面に傾けてお尽しになったかを想像されます。』と。

かくてついに同日午後 11 時 10 分。近親一同および加々美助役を始め市役所関係者、市会議長初め市政関係者、その他親友の方々多数に枕頭を守られ、何らの苦痛をも見せず、永えに瞑目して、63 年の生涯を終れるなりき。

（2025 年 5 月 26 日）